

# 春燈

8 月号

August 2011



主宰の句

安立公彦

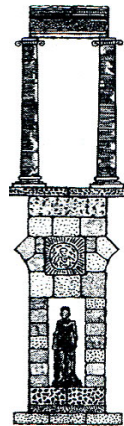
深しんと青梅雨の夜を魚ねむる

安居僧夢のなかにも罌粟咲かせ

神さぶや男にもある更衣

太宰忌の暮れゆく水を俱に見て

時の日やかかのマツチ絵の騎兵隊



久保田万太郎の句

# ぬけうらを抜けうらをゆく日傘かな

『草の丈』昭和二十七年

「銀座」と前書がある。初案はへぬけうらと抜けうらとゆく日傘かなであつたが、「と」が「を」に変わっている。女性が近代的になり、身軽なつた風情を「日傘」と「ぬけうら」で軽快にすずやかに表現している。

助詞一つの変化がこれ程に句相を変えるところは、学ぶべきことであり、よい発見、良い勉強をさせていただいたと嬉しい。

柴崎富子

久保田万太郎の句

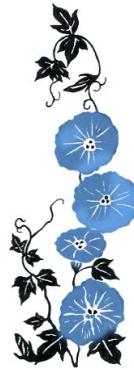
# ものゝ芽にかぐめばありぬ風少し

『流寓抄以後』昭和三十八年

「影あってこそその形」とよく言われる。「かぐめばありぬ」との「影」があるからこそ、「ものゝ芽」の形が活きる。さらに「風少し」が、「影」を一層引き立てている。かがみ込んで、「ものゝ芽」を熟視している作者の姿が目に見え、同時に、「形」の「ものゝ芽」が強く焼き付けられる。「叙景」から「抒情」への見事な流れであり、「影」のあり方を教えられた一句である。

林 紀 夫

# 燈下集



○ 太田慶子

東京へ出る日出たき日パナマ帽（悼・鶴来さん）  
日と風と人寄るベンチ樟若葉  
奉納の朱塗の太鼓青あらし  
風神の肩の重たし梅雨湿り  
梅雨空のかぶさつてゐる隅田川

○ 藤原繁子

嫁ぎゆく姪つ子いとし聖五月  
留袖の裾の捌きも薄暑かな  
塩加減よき白粥や夏の風邪  
ぼうたんの道に迷うてゐたりけり  
短夜や時刻表即愛読書

○ 佐橋敏子

竹筒にたつぷりの水夏に入る  
新緑の風匂ひたつ金色堂  
桐高く咲くや水車の水あふれ  
青梅の落ちては刻をさざみけり  
麦笛や夕日に染まる雲の色

○ 三宅文子

浅草に眉月残る荷風の忌  
小満や奉納絵馬の鶴退治  
梅雨灯す雷門の大提灯  
南無観音恋の日傘をたたみけり  
デンキプランの涼しき色や遠き恋

○ 中島節子

高きより我呼ぶ声や桐の花

葉桜の声賑々し夜の道

武具飾る武具は見るもの飾るもの

屈原は知らず樂しむ粽かな

堅物とききて驚く業平忌

○ 橋本リエ

「鬼子母神米」てふ稲の苗走り梅雨

生かされし右眼左眼若葉かな

術後の眼ことにカラーの白眩し

病廊の非常口灯梅雨入かな

あぢさみのまだ若けれど影持てり

○ 青柳雅子

傘雨忌や川幅せまき滑川

わだかまりの解くるきつかけ豆の飯

失せ物の出てこぬいらち走り梅雨

遍歴は白より始む七変化

始むより了ふは難しほととぎす

○ 木多芙美子

ひとは手を繋ぐ五月の空の下

しづかすぎる夏あかつきの空の色

この木なんの木なんぢやもんぢやや巢立鳥

未練ありあり切られて動く蜥蜴の尾

黙禱の長し卯の花腐しかな

○ 西山浅彦

万太郎春夫いま亡き五月かな

走り梅雨らしきを窓に師の句読む

新樹光朝のホテルの皿真白

アマリリス上々吉の報せ来て

六月やふさぎの虫をもてあまし

○ 小張志げ

ダンディーな帽子溶けゆく春夕焼 (悼)

軽やかにひと渡り来る橋五月

母の日の贈ることばにリボン掛け

父の日や父となる子は授からず

電波の日亡き子へつなぐ糸電波

# 当月集

安立 公彦選



○ 篠原幸子

柿若葉希望のいろの広ごり来

晴るる日の緑陰といふ翳りあり

真実はいつも後出し走り梅雨

山法師折目正しき花かかげ

飼はれゐて驚き易きめだかかな

○ 矢口笑子

陸奥に風の集まる青葉かな

東京の人はせつかち走り梅雨

関の声あげて躓き羽抜鶏

難問の次から次へ蟻走る

その先を見たくて歩む蝸牛

○ 川崎真樹子

肘ふたつ淋しく尖る更衣

滴りに心の澱を流しけり

昼寝覚生れしばかりのひよこの眼

選手宣誓夏空に挿す右手かな

大西日歴代村長肖像画

○ 藤原若菜

夏暁やよべの机辺のそのままに

纏ひみる母若かりし日のレース

風薫る常陸訛のおほどかに

青柚子や師の御前に畏まる

通ひ路の卵の花腐し夕明り

○ 小山繁子

薫風と共にくぐるや薬医門

三溪園風の私語はも楠若葉

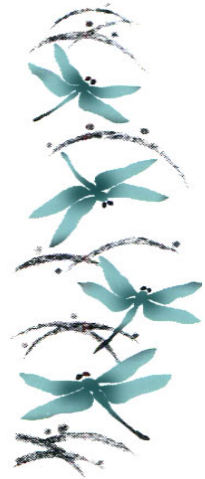
未草鯉ゆるやかに反転す

洋館にジャズの流るや夕薄暑

街をゆく「あかいくつ号」梅雨晴間

# 春燈の句

安立 公彦選



かね惣の地金の光る薄暑かな

東京 佐藤 博重

地の揺れにかそけきも花あやめかな

一村に信号機一つ夏の雲  
梅雨に入る触れば泣き出しさうな空  
これぞこのアンネの薔薇や蕾持つ

京都 加藤 千春

五重塔新緑の空支へたる

家中を風吹き抜くる更衣

玉を解く芭蕉の葉末風勢ふ

東京 小島 昭夫

余震なほ頬やはらかに青田風

桜桃忌富米の墓も訪ねむか

何故か気のはれぬひと日や栗の花  
京都機町なれど音なしつばくらめ  
降り足りて苔盛りあがる律庵

兵庫 和田 絢子

時鳥またほととぎす古寺の森

被災せる老人ホーム花の冷

宮城 西川 春子

忘れぬし自然の恵み木の芽たつ

朝の厨幼き初音に耳をかす

麦の穂を活けて静かな雨を聴く  
短夜のラジオは恋の歌ばかり

奈良 小田 明美

湯上りの鏡もの憂し春の果

鬼瓦喜色満面初幟

神奈川 石田 康明

夏空に飛行機雲を置忘れ

豌豆むき恋の歌など口ずさむ  
黒薔薇の雨の気配に零れゆく  
もう三日あめ紫陽花の軒ぬらす



# 余言

安立公彦

夕暮や六月白き花ばかり

富山 俊雄

清涼な句である。季節としての六月は、例えば青年のような五月と、壮年のような七月の狭間にあつて、しかも梅雨前線に包まれた暗鬱な日々というイメージが強い。

しかし作者はその六月を「白き花ばかり」と肯定する。そう言えば六月に咲く花は白を尽した花が多い。花橋 梶子、卯の花、南天の花、沙羅、山法師、更には庭石菖や十薬も六月の花だ。ただ作者はそれらの花を無条件に肯定している訳ではない。下五の表現に捻りを見せる。その捻りが「六月」とみごとに調和を保つ。達意の句である。

牡丹や暮るるに間ある子持山

松橋 利雄

「悼 鶴来様」の前書がある。私たちはまた大切な先輩を彼岸に送ることになった。かねて入院されていることは聞いていたが、訃報を聞くとき全身の気力が抜け落ちる思いがした。四月二十八日、八十七歳だった。春燈誌への投句は五月号が最後となる。〈立春大吉朝から鳥のよく鳴いて〉五月号冒頭の句である。

「大悟」という言葉がある。この時の句はまさに大悟の一句である。決して高ぶらず、お洒落な風貌は、接する全ての人に慕われた。終の栖は群馬県渋川市。子持山や赤城山を望む地だったと聞く。掲出句、在りし日の鶴来さんを偲ぶ思いが、「暮るるに間ある子持山」によく出ている。

花咲くも散るも見ず病む月日かな

小島 禾汀

作者の入院を聞いたのは三月だった。入院中の面会も禁止という。投句のことなどは、川崎の高埜良子さんを介して行った。六月に入り病状も安定して来たという知らせに安堵しているところに、八月号の自筆の投句用紙が届いた。

一句に漂う切迫した思いは、見ていて痛々しいばかりである。しかし同時発表の、〈点滴のひねもすあかり梅雨灯り〉の句には、自身の点滴を客観的に見ている余裕が感じられる。平癒を願うばかりだ。

浅草に眉月残る荷風の忌

三宅 文子

永井荷風が亡くなったのは、昭和三十四年四月三十日。

七十九歳だった。『断腸亭日乗』によると、四月十九日、大黒屋で昼食、二十九日の日乗には、「祭日。陰。」とのみある。三十日の朝、通いの女性により遺体が発見される。この日の早暁、胃潰瘍の吐血による、心臓発作が原因。

昭和二十年の大空襲により、自宅である麻布の偏奇館が消失、死去した時の住まいは市川市八幡町。最後の昼食を摂った大黒屋は、現在も京成八幡駅前にある。

この句、「眉月残る」がいい。暦を見ると、今年の四月三十日は月齢二六・五、まさに眉月である。

人生リセット眩しきものに柿若葉

松本 俊介

「退院一年」の前書がある。作者もまた長く大病を患った。それは以前から治療を受けていた大学病院の担当医も処方にも迷うほどの難病だった。しかしその病院から紹介を受けて専門病院に移ったのが快方への道だったという。

ただ、この句を見る限り、そういう背景は一切取り払われている。「人生リセット」と、「眩しきものに柿若葉」のみの提示である。しかしそこから感じ取れる思いの深さは、幾多の言葉よりも緊密に読み手の胸を搏つ。

水鶏なくや傷つきやすき水の面

武田 巨子

「水面」を「傷つきやすき」と表現する。何と繊細な凝視であることか。例えば「水鶏たたく」というこの季語の傍題

がある。その「たたく」から誘引された「傷つきやすき」であるかも知れない。しかしそういう末節のことに拘ることは必要ない。この句「水鶏」の実存の表現である。

背伸びして通ひし街や夏の雨

久米 憲子

この「背伸び」が身体的に屈伸でないことは書くまでもない。それは「若さ」である。五月の末に行われた燈下会鍛錬会での一句。会場は浅草。若さにとつて背伸びは大事な節目だ。今作者は自らの若き日をふり返り、しばし懐旧の思いにふける。感傷に堕ちず、いい風情だ。

良質の眠りの欲しや薔薇香る

吉川 隆

「良質の眠り」を欲する作者。しかしそれは高齢者全ての人にとつて切実な欲求である。眠れぬままにラジオ深夜便に聞き入る人も多かるう。作者にはしかし「香る薔薇」がある。薔薇は香料のもと。良き眠りも訪れよう。

燕の子被災校舎に口開き

棗 怜子

東日本大震災を詠んだ句は多かった。しかしそれらの中には、報道からのコピーに過ぎない句もまた多かった。この句、視線を転じて、「被災校舎」を写生しているのが良い。「口開き」が可憐だ。